

# CHARLES-ÉMILE JACQUE

シャルル＝エミール・ジャック (1813～1894)



## 風景の中の羊の群れ

作品名 もしくは平原で羊の群れを連れた羊飼

種類 紙にコンテ 1859 年作

サイズ 61.7×97.8 cm 仏 40 号

略 歴 バルビゾン 七星の一人

1813 パリに生まれる。

地元の版画職人の見習いに入る。

1830 その後、志願して6年間軍隊生活を送る。  
兵役後、渡英。イギリスにて挿絵を制作(約2年間)  
フランス帰国後、銅板画家、挿絵画家として活動(1843頃まで)

1840 頃 モンマルトルの風景を描き始める

1845 エッチング(版画)でサロン入選。  
その後、版画家として幾度か入選。この頃、ミレーと出会う。

1849 暴動とコレラで混乱するパリを逃れ、ミレーと共にバルビゾンに移住。  
ミレーとは隣り合った家に住む。  
その後、家畜や農業をはじめ、主題も家畜が中心となる。  
ミレー、ルソーと共にバルビゾン派の基礎を築く

バルビゾンの村でジャックはミレーやルソーのすすめもあって油彩画を描きはじめ、版画時代に築きあげたすぐれた技巧を油彩画に反映し、羊の群れと羊飼という牧歌的な主題を写實的に描いてたちまち人気画家となった。

1854 バルビゾン村を去る

1861 サロンに絵画を初出品。その後、動物画が中心に

1894 パリにて死去  
本作品は1861年にシャルル＝エミール・ジャックが初めてサロンに初表した作品のもとに成った作品です。現在その作品はオルセー美術館に収蔵されているが、小品が多い本作家にしては珍しく176×280cmと巨大で当時サロンへの思いと彼の風景画家としての矜持を感じさせます。本作品は当時、紙にコンテで描く事が流行していました、その紙にコンテにて描かれた傑作であります。作家の鋭い観察眼や素直な写実性が滲み出ており、また非常に印象派に通じる光の捉え方が繊細にして大胆でかつ朝の構図が巧みに描かれています。バルビゾン派を代表するジャックの作品として十分満足できる作品です。